
夢幻の現

シュウジ・クロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻の現

【Nコード】

N5093V

【作者名】

シュウジ・クロス

【あらすじ】

ありきたりなオリ主ものまあ見ていただけたらこれ幸い

第壱話

「此処はどこだ？」

俺は今真つ白な空間にいる

「そうさな此処は死後の世界とでも言っておくか」

誰だこのおっさん

「おいおいせめて初老の紳士とでも言え」

年老いているという点は良いんだ

「まあそこは若造よりは威厳があるからのお」

「そんなことより此処の事死後の世界と言っていたが俺は……どんな死に方だった」

「……いきなり変化球とは驚くな」

「此処が死後の世界と言うことは俺は死んだなら死んだことを嘆いても仕方ないから自分の死に様を知りたいね」

「お前は道路に飛び出した子供を助けて死んだ」

「そうかいならこれから俺はどうなるんだい」

「お前が生前積んできた善行を考えるともう一度生を与えても良いと言うことになった但し別世界でな」

「別世界？」

「そつだな簡単に言えば漫画アニメの世界へ転生だついでに願いを五つまで叶えてやろう」

「今まで突っ込まなかったがお前神か？」

「平たく言えばな」

「そつか因みに俺が行く世界はどこだ」

「お前が行く世界は恋姫夢想という世界だ」

「ああ、あれね」

「で願ひ事は？」

「そつだねじゃあエニグマと言う漫画の三次減算と言う才能を一つ目に」

「あいわかった」
「二つ目に戦国ARMORSの甦土武夜叉をくれ」
「良いだろう」
「そうだな……ならこれは僕からの特典で精気無しで使えるようにしてやるう」
「あざっす」
「で三つ目は？」
「身体能力の向上」
「どれくらいだ」
「そうだねメタルギアの全盛期のスネークばりで」
「わかった」
「四つ目は一番最初に頼んだ三次減算について」
「どういう事だ？」
「小さくした物は俺の半径二メートル以内ならどこでも元の大きさに戻せる」
「まあいいだろう」
「五つ目はその他の甦土武を作れるようにしてほしい」
「良かるう」
「これで五つだな」
「最後に一つ」
「なんだ？」
「これは転生だ、だからお前が5歳位に自我と頼んだ才能等を目覚めるようにしよう」
「ありがたい……だが甦土武はどうなる」
「そうだなじゃあお前が夜叉を作れそのかわりもう一つ願いを叶えてやる」
「ありがとうじゃあBASARAの毛利元就の容姿と知識をくれ」
「二つのような気もするがまあいいだろう」
「ありがとうな」
「ここを通れば後戻りはできん覚悟はあるか」

「あるさ無けりや嘆いてるところさ」

「ならば行ってこい」

「ああ、ありがとう」

そこで俺の視界は真っ白になった

第貳話（前書き）

文章書くの難しい

第貳話

はい〜え〜此方學惣です五歳になりました神からもらった能力が使えるようになりました

まず現状報告をば

年は先ほど言つたように五歳です

はいそこ早いとか言わない……御都合主義だ

そんなこんなで今私はどこか小さな邑で元気に死にかけてます

私の父親にCQCの練習をやっているところを見られてから修行というなのリンチまたは処刑を受けています。

私の父はそこそこ名の知れた武官だったらしく強いよ……え、何キヤラが違つて？そんなのずっとボコられてりやこうなるわ！

まあそんなことは地平線の果てにでも殴り飛ばすとしてスネークの力をもつてしても勝てないってなんだお前リキッドカリキッドなのか！？

失礼話がそれた……まあ簡単に言えば楽しくやつてるさあ

七年後

いや〜時が経つのは早いなアツツーまに今十二歳よ

最近ようやく修行という名のリンチを終え滅茶苦茶強くなりましたはい拍手

パチパチ〜

独りでやつても虚しい

ところで最近ようやく甦土武夜叉を作ったぜ正直懂れだったからなこの武器ついでに三次減算を使って最大百メートルまである刀も作ったさやべえ神槍格好いい普段はただの刀の長さに調節してある。

神が三次減算をさらに改良してくれたみたいありがたい

さてそろそろ本題に入ろう

今我は山賊の根城の前にいる理由は

「元就おまえも強くなったこれより父からの最後の試練だ山賊を殺してこい」

との仰せだ

よって今から初めての实战だ

「浮」

我は空へと飛び立ち

「空刃弦月！」

一撃で山賊の根城を半壊させた

うん威力が高すぎるなるべく使うの止めよ

「なんだ!？」

山賊がわらわらとでてきた

浮を解除し我は降り立った

「我は日輪の申し子擧惣禪我なり貴様等を滅ぼすため此処に来た今すぐ改心し投降するなら受け入れよう!」

「はっ投降しろだあてめえ一人で何が出来る?」
話すことはもう無いな

ならば

「射殺せ」

刀を抜き構える

「神槍」

刀が伸び射線上の敵を射抜く

「戻れ」

一度に約五十人前後刺し貫いた
「なんだこいつ何しやがった?」

「貴様等に教える義理はない」
「そうだ三成の言葉を借りよう」
「愚鈍な己を懺悔して死ね」
戦い、いや一方的な虐殺を行った後我は吐いた
人を殺した罪悪感から吐いた
父はそれで良いと言ってくれた

またしばらくの月日が経ち

「旅に出ようと思う」

「そうか」

「気をつけてね」

「何も聞かないのですか」

「お前が決めたことだ親の勤めは子の夢を潰す事じゃない子の夢を
応援するものだ」

「そう言うこと」

「ありがとうございます御座います父上母上」

「いつ行くんだ？」

「明日には」

翌日

「では行つて参ります」

「「行つてらっしゃい」」

まずはどこを目指そうか

設定

名前 擧惣禪我 キヨソウゼンガ

真名 元就

一人称 我

二人称 友人：名前 親：父上母上 礼儀正しい他人：あなた 礼儀が悪い他人：賊・敵：貴様

武器 主：投擲用小刀・近接用武器全般・神槍 副：甞土武夜叉

概要 主に三次減算で武器を小さくし大量に所持している（めだかボックスの宗像のような感じ）

三次減算の事は奇術としてごり押しする

三次減算は生物には使えない

因みに神からの特典と言うなの御都合主義で大きさだけでなく長さだけや重さだけという風になりに便利な能力になっている

三次減算で長さを小さく（短く）した場合全体の密度が濃くなり刀の場合かなり折れにくくなる

甞土武はあまり使わないが戦術兵器として使う事を主とする

身体能力は強さ的には呂布に少し劣る程度だが毛利元就同様の知識も用いて戦うため戦術的に言えば擧惣の方が強い

甞土武夜叉は作成してから常に装備しているが戦術的用途以外には移動に使う

神槍は三次減算を使えばそれっぽいことできんじゃないかな的な感じてやったら出来たから使っている

技

空刃弦月 甞土武夜叉装備時真空の刃を飛ばして相手を切り裂く全力でやれば城一つ真つ二つにできる

浮世絵 甞土武夜叉裝備時周りの大氣を吸い込み噴射することで空を飛べる

CQC 言わずとしれたスネークの得意技スネークの身体能力を貰ったときにどうせならと覚えた

三次減算射出 三次減算を使い小さくした武器を元に戻しその勢いを使い相手を射抜く技、また先に地面等に設置しておけば敵が三次減算範囲内に入ったとき飛び出させ射抜く畏的な用途もある

三次減算隴 小さくした武器を投げ範囲内の中で元の大きさに戻し相手を射抜く技射出と違いまとめて幾つかの武器を投げるため相手の意表を突いたり撤退するときに有効

三次減算死招 武器を粉の如く小さくし相手の体内に入れ三次減算範囲内に入ったとき元の大きさに戻し内側から刺し貫く技隴と併用して使う事も可能

三次減算神槍 bleachの市丸ギンの始解を真似て約百メートルの刀を三次減算で小さくしておき使う際に三次減算で元に戻しあたかも伸びたかのように扱う

第参話（前書き）

正直言おう何を書いているんだ俺は
少々意味不明な部分も有るかと思いますが気にせず見ていただきたい

第参話

「触らないでよ！」

迂闊だった最近この近くに賊が確認されてないからと言って旅に出るのには失敗だった

「断れるお前みたいな奴は高く売れるからな」

「その前に俺達で戴くか？」

「そりゃあいい」

はははそうだなと笑っているこんな事なら旅になんて出なければ良かった少なくとも護衛を付けとくべきだった後悔してももう遅い私こんな奴らに……

「ゲスめその汚い口を閉じろ」

その声と共に一人の賊に何かが刺さっていた

「何だお前！ いったい何をした」

「屑に話す言葉はない」

「何だとおこの野郎……」

「口を開くなと言っている」

もう一人の賊もいつの間にか絶命していた

「くそつ！ 覚えてろ！」

残った賊は彼に恐れを為したのか逃げていった

「大丈夫か見たところ一人旅のようだが」

「近づかないで！あんたあいつ等の仲間じゃないの！？」

安心させたところでその隙につけ込む……あいつ等の常套手段だ

「ならあいつ等を殺す必要は無いはずだが？」

「それでも気に入らない奴らだったということもあり得るわ！」

そうでなくても男は嫌いなのに

「まあそう思いたいならそう思うがいいだがどうするんだもつじき日は暮れる近くに邑もない我はここらで野宿するがお前は？」

「嫌よ！私は行くわ」

「そうか」

「これだけは行つとくわ助けてくれてありがとう」

「擧惣禪我」

「何？」

「我の名だ」

「……荀イク文若」

「じゃあな荀イク」

「ははは学習しないねお嬢ちゃんさっきの奴はどうした」

賊の人数が増えていた恐らくこの近くに拠点があるのだろう

「ッ……！」

私は逃げ出したけど数の暴力に勝てず

「キャッ！」

捕まってしまった

「可愛いじゃねえかさつきは変な奴がきてしくじったが今度はお前を守ってくれる奴はいねえぞ」

擧惣の言葉を信じておけばよかった今はその事しか頭にない

奴らの拠点に連れてこられた周りには他にも捕まっている人がいる

そこに賊の頭みたいのが数人の賊を連れて来た

そして私の前でしゃがみこみ

「こいつがお前が言っていたのは」

「へい」

「なかなかどうして可愛いじゃねえか」

そう言いながら私を触ってくる

「触らないでよ妊娠しちゃうでしょ！」

「へえ気が強いねだがそう言うのは嫌いじゃないだが気にいらねえなその態度」

「おいお前等」

「へい」

「こいつを俺の部屋に連れていけ」

「何をするんで？」

「こいつに女の喜びを教えてやるのさ」

「お頭それが終わったら俺らにも」

「ああいいさ」

「ちよつとふざけないでよ」

「うるせえんだよ」

バキッ

私こんな奴らに

「此処で最後か」

「何者だ？」

「貴様等に口を開く許可を出した覚えはない」

「此処にくるまでかなりの兵がいたはずだが？」

「口を開く許可を出した覚えはないと言ったはずだが、まあいいだろう此処にいる奴以外は全員殺した」

「何だと！」

「三度目だもう貴様等に話すことはない死ね」

「ふざけるなよ！」

「射殺せ、神槍」

舉惣がそうつぶやいた瞬間刀が伸び賊を一人貫いただがそれだけにあきたらず舉惣は刀を横に振り纏めて賊の首を跳ねた

「もう賊はいない自由にするがいい」

舉惣は笑顔でそう言った

周りの人は歓喜し騒ぎ出した

「大丈夫か？荀イク」

「桂花と呼んでください」

「真名ではないのか？」

「舉惣様なら構いません」

「なら私の真名を預けよう我が真名は元就だ確かに預けたぞ桂花」

「はい元就様」

「ではさらばだ」

「待ってください」

「何だ」

「私を連れて行ってください」

「お前は旅をしていたのではないか」

「はい曹操様に仕えるべく旅をしていましたが今私は貴方に仕えた
いのです」

「……よからう来る者拒まずだ」

「ありがとうございます元就様」

「何故様付けで呼ぶのだ」

「それは……」

元就様に惚れたなんて……

「まあいいならば桂花いくぞ」

「あッ待つてください元就様」

「ところで元就様何故此処へあそこで野宿されたのでは」

「ああ、あれは囷だ奴らを騙すためのな」

第参話（後書き）

駄文ですいませんした

第肆話（前書き）

メタルギアネタ入れました

前話よりはましな内容になっていると思います。

キャラの口調が分からないorz

第肆話

我達は今洛陽へ向かう途中にある邑に泊まっている

桂花こと荀イクは軍師だ、だからこそ策と言うのは考え実行するだけでないと言うことを教えなければならない

幸いと言うのはおかしいがこの近くに黄巾党の根城があるそうだが我達はその殲滅を買って出た邑の人々はたった二人で何が出来ると言っていたが我には策がある、桂花にも教えるべき策が

翌日早速桂花を引き連れ黄巾党の根城へとやってきた

「桂花」

「何でしょう元就様」

「お前は策とはどういうものだと思う」

「……策とは自軍の損害を減らし敵軍をいかに倒すかと言うものだと思いますがそれがどうかしましたか？」

「言い方を変えよう策には何を使う」

「兵や将を主とした軍隊などを使います」

「確かにそうだがこの状況ではその策に使う物はない」

「ですが元就様の武があれば」

「……桂花よく見ておけ本当の策と言うものを」

「……はい」

「浮」

私には元就様が聞いてきた質問の意味が分からない策とはなんなのかそれは誰もが私が言ったことと同じ事を言うだろうなのに元就様は本当の策と言ったいたいという事なのだろうか何にせよ見届

けなくては

敵は一万ほどこいようだが都合がいい

「我は擧惣禪我貴様等賊を討つ者なり！貴様等のような屑は早々に滅ぶがよい！」

見込みどおり賊が出てきた、さて

「俺達を討つだとおお前一人で何が出来る！野郎どもかかれ！」

一手目は敵を高ぶらせるこれは成功した次の手は
神槍を抜き

「射殺せ神槍」

二手目は敵の動揺を誘う

神槍によつて三十人ほどの賊が貫かれ息絶えた

三手目

「空刃弦月！」

相手の恐怖を煽る

空刃弦月によりさらに百人ほどが胴からきれいに別れた

四手目此処からが本ば「加勢するで」ん

どこかの軍が黄巾党を殲滅するために来たようだ、だがこれでは予定が狂う

「助太刀感謝するしかし少々待っていたきたい」

「あんた何言つてんねん早よ潰さな」

「これからやる必要がありますですから待っていたきたい」

「……わかった少しだけ待った」

「感謝します」

少々予定が狂ったがさらに軍が来たことでさらに動揺が生まれることは嬉しい誤算だ

そして本命の四手目

「余りにも凶暴で愚かで脆いこれが人間だ！」

声を張り上げる

突然のことに賊の動きが止まる

「昨日までの隣人が、戦友が、家族がお前に武器を向けるかもしれない。」

賊が少し騒ぎ出してきた

「お前を恨んでる人間はいないか!？」

「お前を馬鹿にしている人間はいないか!？」

賊が徐々に我の言葉に引き込まれていく

「お前は本当に必要とされているのか」

「お前を殺してやりたいと思っている人間は本当にいないのか!？」

「お前等の中にも我の仲間がいる」

賊が周りを疑いだした

「お前の敵はお前の直ぐ傍にいる！お前が、いや！お前だったか」

「お前かあいつの仲間は」

「お前こそ」

いい感じに味方を疑いだした

「そら、いたぞ！」

三次減算朧を使い何人かの賊に小刀を刺す

小刀が刺さった賊は息絶え死ぬ

死んだ賊は倒れ込み持っていた武器が周りの賊に当たる

小刀を投げたのが見えた奴も射るようだ

「うわぁ本当に攻撃してきた！」

「お前がやっつたんだ！」

「いやお前が！」

「静まれ！あいつが殺したんだ」

だがそんな言葉は届かない

その波は徐々に広がり最後は賊同士で殺し合いを始めた

気付くと賊は最初の三分の一にも届かない人数にまで減っていた

「もう良いですよ」

「数減らしてくれたこと感謝するで、全軍！突撃一人も逃がすな！」

さて後は任せてもいいだろう

「桂花」

「はい元就様」

「策と言う物はある物は全て使わないといけない、言葉は特にだ」

「人は言葉一つで疑い、信じ、拒絶し殺す言葉は最高の道具であると同時に味方も傷つける刃になる」

「言葉……」

「そうだ軍師たるもの言葉を知らなければならぬ言葉をつまく使えば損害なんて無しにできる」

「お前が言った策は正しいだがそこに言葉を加えておけ」

「……はい」

「さて、何のようかな將軍さん」

「なんや気づいてたんかいな」

「一応武人だからな」

「まあええわ、此度の賊討伐に協力してくれたこと我が主董卓にか

わり董卓軍が将張遼が感謝する」

「此方としても都合が良かったのでね頭を下げられてもそれに喋り方も普通でいいですよ」

「そうか、じゃあ普通に話させてもらうでこの賊討伐について感謝したいから洛陽までついて来てくれへんか？」

「一石二鳥だな我達も洛陽に向かうところだったからなよろしくたのむ」

「おおきに、うちは張遼文遠、真名は霞や」

「我は擧惣禪我、真名は元就だ桂花お前もだ」

「私は荀イク文若、真名は桂花よ」

「じゃあついて来てな」

第伍話（前書き）

ネタはあれども文にできない

文才が欲しいよう

しかも短い……

更に意味が繋がらなくなったりしてる

俺はなにを書いているんだあああああああ

第伍話

「此度の賊討伐に協力頂感謝します」

今我等は董卓に賊討伐についての感謝を受けている

「何時ものことだ」

「ですがおかげで被害が少なくなったのです」

「ならば素直に受けるとしよう」

「はい、詠ちゃん」

「わかったわじゃあこれから恩賞について説明するわ」

「桂花任せるぞ」

「はい」

恩賞については桂花に任せておけばいいだろう

問題は

「貴様私と戦え！」

こいつだ

先程董卓から紹介があり華雄と言ったなここまでうるさいとは……

「なあウチとも戦ってくれへん」

訂正霞もだ

「そこまで戦いたいのか？」

「ああ」

「あんなん見てたら戦いたくもなるで」

この戦鬪狂どもが

「いいだろう」

「そいなら中庭にいくで」

「貴様早く行くぞ」

所変わって中庭

「纏めてこい」

「なめてるのか貴様」

「そうやで」

「問題ない」

「ならば行くぞ！」

「怪我しても知らへんで」

華雄が戦斧を振り下ろしてくる

それを横に飛んでかわす

そこに霞が追撃を仕掛けれる

またかわす

華雄が戦斧を横なぎに振るう

かわすひたすらかわす

「なぜ攻撃をしない！」

「する必要がない」

「どういう意味や？」

「こつという事だ」

今まで同じことの繰り返しで徐々に疲れまた避け続けられることで
苛つかせるこれで下準備は終わりだ

華雄が攻撃を仕掛けてくる

今度は避けることをせず

一歩前に進み霞の視界から外れたところで斧の柄を軽く弾く
斧の軌道が外れ霞が居る方へと流れる

「くっ……」

霞は突然のことでギリギリで何とか防御を行う

しかしそれが命取り

三次減算を使い刀を取り出し二人の首に押し当てる

「終演だ」

「負けだ」

「えらい強いな、元っち」

「それなりにな、それよりは元っちとはなんだ？」

「元っちは元っちや」

まあいい

「所でお前はやるのかい」

「……………コク」

「恋どこにいたん？」

「寝てた」

「ところで名前は？」

「呂布」

骨が折れそうだ

第伍話（後書き）

因みに更新は気まぐれなので悪しからず

第陸話（前書き）

短い

戦闘シーンが微妙

何だかなあ

あつ因みに

PV4,500超え

ユニーク1,000超え

になりました

こんな拙い文章を読んていただきありがとうございます

これからもこんな拙い文章に付き合って頂ければこれ幸い

第陸話

「……呂布」

「舉惣禪我」

戦前の自己紹介を終え

「……行く」

「来るがいい」

呂布との闘いが始まった

相手は三国志最強の武将だ少々本気を出すとするか

呂布が方天画戟を振り下ろす

それを最小限の動きでかわし呂布の後ろに回り込む

危機を察知して呂布は方天画戟を振り回し背後へ攻撃を仕掛ける
だが遅い

「吹っ飛べ！」

甦土武夜叉を使い呂布を空へと打ち上げる

「浮」

浮を使い自分も空へと飛ぶ

そのまま追撃を……「……そこ」流石は飛將軍と言ったところか

空中で自由に動けない中方天画戟を振り回し遠心力を使い攻撃をする
だが

「甘い！」

空中で自由に動ける自分に取っては悪手だ

夜叉を使い呂布の攻撃をかわし呂布の上へと移動しかかと落としを
見舞いする

だが敵は天下の飛將軍自由に行動出来ない中何とか方天画戟で防御する

しかしかかと落としの打撃は防御出来ても落下速度は増すだけだ
これでは墜落時の衝撃は半端ではない

夜叉を使い落下する呂布の横へと追いつく

こんな状況でもまだ攻撃しようとする

呂布は方天画戟を遠心力を使い振り下ろす

そのせいか落下速度も上昇する

このままでは本気で洒落にならん

未だ武器を振るう呂布の攻撃を避け服を掴む

そのまま引き寄せ抱き上げる

所為お姫様抱つこと言う奴だ

徐々に徐々に地面が近付く

地面まで後数メートルと言うところで夜叉を使い減速する

そして地面すれすれでふわっと浮き着地する

「大丈夫か？」

「……コクノノ」

気のせいか少々顔が赤い

呂布を地面へと降ろし

「終わりだよろしいかな？呂布殿」

「……恋でいい」

「それは真名ではないのか」

「懽懽ならいい」

「なら自分も真名は元就だ」

これにて模擬戦は終わりを告げた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093v/>

夢幻の現

2011年10月8日20時50分発行